

〈書評〉

下河辺美知子監修 高瀬祐子・日比野啓・舌津智之・巽孝之 編著
『アメリカン・マインドの音声——文学・外傷・身体』
(小鳥遊書房、2019年)

萱 場 千 秋

本書は、「アメリカン・マインドの音声」というテーマを共有した10名の執筆者による論文、そして、この度成蹊大学をご退職された下河辺美知子氏による計8本の書評・劇評からなる記念論集である。本書の執筆者は、下河辺氏の「長年の同志」、「共同研究者」、「同僚」、また、「教え子」など、年代や立場、専門の異なる研究者達である(24)。ゆえに、多岐にわたる作家、作品、歴史的対象を取り扱う論文が寄稿された。このような多様性は、序文で巽孝之氏が述べているように、「アメリカン・マインドの多声学的な音響風景を表現」という本書の試みに呼応したものである(ibid.)。以下に、10本の論文の内容を紹介していきたい。

第1部「音が響く」では、テキストに立ち顕れる身体、感覚、あるいは、情動を読み取ろうとする3本の論文が寄せられている。第1章は、『アッシャー家の崩壊』論である。マデラインがロデリックに倒れ込むという物語の終焉に、21世紀のテロリズムにおける「国家の内部」の崩壊を読み込むものである(高瀬祐子, 44)。続く第2章は、ハーマン・メルヴィルとラフカディオ・ハーンが描き出す「コスモポリタンの人物」における「異文化に対する不安と受容のプロセス」を考察している(54-5)。2人の作家は、「現世界と異界の分水嶺」(59)、あるいは、「超自然的現象が日常世界」に入り込んだ際の希望や不安を

(66)、それぞれ「音」によって表現しているという（佐久間みかよ）。これらの身体感覚にまつわる論文を引き継いだ第3章において、新田啓子氏は、ヘンリー・ジェイムズが物語に書き込んだ「恥の位相」を読み解いていく（98）。氏は、家系や作家自身の経験を辿ることによって、ジェイムズが「恥という情動の特異な力」に注目していた可能性を指摘する（83）。氏によれば、短編集『気恥ずかしさ』に収録された4編の物語において、ジェイムズは、「語り手の恥への感受性を動員」している（88）。しかし作家は、「恥」を自身の文学表現の糧としつつも、それを「ただ赤裸々な体験談」として描いたのではない（99）。彼は、「欺瞞性」、「利己主義」、あるいは、「嗜虐性」など、多様な対象への批判的な意識をもって、「倫理的な問い」を作品のうちに練り上げていったという（ibid.）。

第2部「音楽が響く」における4本の論文は、芸術作品やその作家の中に響く音楽が、いかなるものを伝えているか、読者に提示してくれる。第4章で、日比野啓氏は、1938年に封切られた異色のミュージカル映画、『気まま時代』が、「精神分析のイデオロギーに取り込まれている」さまを示し出す（106）。本作には、同時代のミュージカル作品、『現実に立ち向かえ』に描かれたような、当時の景気後退に伴う社会の諸問題が描かれることはなかったという。しかし、氏は、作品内に散りばめられた精神分析の要素を追うことによって、『気まま時代』が、「男性による女性の心の管理＝支配」という「当時の精神分析の主題」を前景化するものであったことを証明している。続く第5章は、「執筆することもある作曲家」と自認しているポール・ボウルズの『シュルタリング・スカイ』に関する議論である（130）。本論は、「西洋音楽を基準」にした場合、「場違い」に聞こえるかもしれない異国の音に焦点を当て、考察を行っている（132）。それによって執筆者は、本作が、異国と米国を「音楽を介在させつつ重ね合わせ」るものであること、ひいては、作家が、「音楽と文学を結びつけた芸術家」であったことを、明らかにしていく（大串尚代、150-3）。それに続く第6章は、合衆国憲法とジャズへのラルフ・エリソンの姿勢を詳らかにしていく。作家はこのふたつを、ともに、「排除されているからこそ統合されるという逆説」を持つものとして見做しているという（175）。執筆者によれば、これは、エリソンの「人種関係論」にも顕れているものである（権田健二、179）。第2部の最後は、舌津智之氏による『欲望という名の電車』論である。氏は、ブランチャが口ずさむ流行歌、「イツ・オンリー・ア・ベイパー・ムーン」から、彼女が無意識に反芻する「夢とトラウマ」は、まさにニューディールの時代の記憶で

あったことを割り出す (189)。さらに氏は、作品に書き込まれた当時の政治・経済・文化的状況の精緻な分析によって、1947年初演、ニューオーリンズを舞台とするこの戯曲が、「三〇年代にそのルーツをもったニューディール文学」となりうるという側面を照らし出すのである (199)。

第3部「声が響く」を構成する3本の論文は、米国の古典文学とナショナル・ナラティヴを考究するものである。第8章と第10章は、いずれもアメリカン・ルネッサンスの巨匠、ハーマン・メルヴィルとナサニエル・ホーソーンを扱う論文である。第8章は、多様なバージョンのテキストが存在するという『ピリー・バッド』について、その編集作業を参照しつつ、「メルヴィルの言語」の読解を試みている(板垣真任, 230)。また、第10章は、「捕鯨」という、米国史における重要な主題に注目し、ニューイングランドの歴史的事象を紐解きつつ、『緋文字』と『白鯨』の分析を行う。ふたつの作品における「首切り」の表象にみる両作家の異なった態度から、ピューリタン文学における「錬金術的な変化」が検証される(巽孝之, 288)。2本の古典文学研究とともに配置された第9章、オバマのヒロシマ・スピーチ読解は、文学と無関係ではけっしてない。むしろ、執筆者の伊藤詔子氏は、このスピーチの「文学性」を高く評価している(253)。核表象を行う文学作品群の出現、それに伴う環境批評の台頭は、オバマの広島来訪を促すものであったという。氏は、オバマのスピーチの文学性を3つの観点から分析する。1つ目は、「心理的苦痛」や「差別感」を表現する「ヒバクシャ」という語の使用(245)。2つ目は、「広島」という場所に近づこうとする謙虚な「場所の感覚」(246)。3つ目は、被爆者の物語を米国の「ナショナル・ナラティヴ」と接続する試み(250)。結びとして、氏は、ソローの「市民の反抗」を引用しつつ、その思想を受け継ぐオバマの声が、今や世界的ナラティヴとなって共有されていることを提示するのである。

以上が本書に収められた10本の論文である。それぞれの論文から感じ取れるのは、高瀬氏があとがきで述べているように、門下生が「下河辺先生から共通して学んだこと」、つまり、「研究の面白さ」であるように思う(337)。個性豊かな「音」によって構成された本書は、その面白さを余すことなく伝えるものとなっているだろう。